

関西国際大学 卒業生調査結果報告（2024 年度実施）

キャリア支援センター
評価センター

❖ 卒業生調査（旧称 卒業生追跡調査）について

本学では、本学での学修活動やキャリア支援の取組みが卒業後のキャリアや生活にどのように活きているか、その効果や影響を推察するために、卒業生や就業企業・団体を対象とした卒業生調査を実施して情報を収集しています。

この調査結果は、今後のキャリア教育のほか、教育効果の検証と質保証、ならびに教育活動を改善する取組みなどに活用していきます。

【実施概要】

調査対象	・ 卒業後4年目を迎えた卒業生（2020年度卒業生）：505名 ・ 就業先企業、病院および団体等：305社 ※キャリア支援センター・評価センター協働実施
調査方法	Web調査
調査時期	2025年 1～2 月
回答状況	・ 卒業生回答 51件 回答率：10.1%（昨年度 8.4%） ・ 就職先回答数 103件 回答率：33.8%（昨年度 31.5%）
調査結果の活用	① キャリア支援センターにおける就職指導において業種、進路先名も含めた具体的な指導に活用 ② 看護学科教員による入職現場での業務分析 ③ 各学科における卒業後の教育成果・教育効果の検証と教育改善への活用 ④ 学外機関などの客観的視点の聴取とそれに伴う教育施策改善への活用

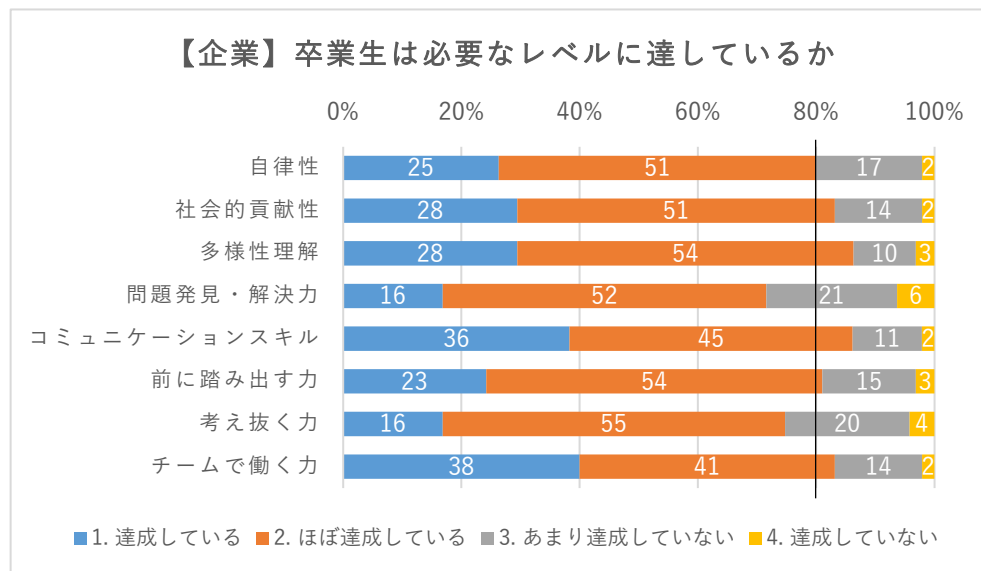
○調査結果分析と今後の改善に向けて

- 企業からの評価として、本学の卒業生はベンチマークに掲げる能力（DP）および社会人基礎力について、概ね求められている能力に達していると評価できるが、「問題発見・解決力」については改善の余地がある。これを身につけるための指導方略の改善が必要といえる。
- 経験学習やアクティブラーニングなど、本学の特色として実施してきた教育方法は、卒業後においても長く影響し企業評価も高いが、引き続きプログラムの内容を改善していくことが重要である。
- 卒業生の自己評価では、専門知識、外国語の運用能力など知識・スキルに関して、実感として成長が十分感じられていない事項が多い。そのため、専門知識・スキルが身につけられるよう改善を図るとともに、その知識・スキルが現実社会とどう関連するのかを理解できるような教育を行うことが必要である。

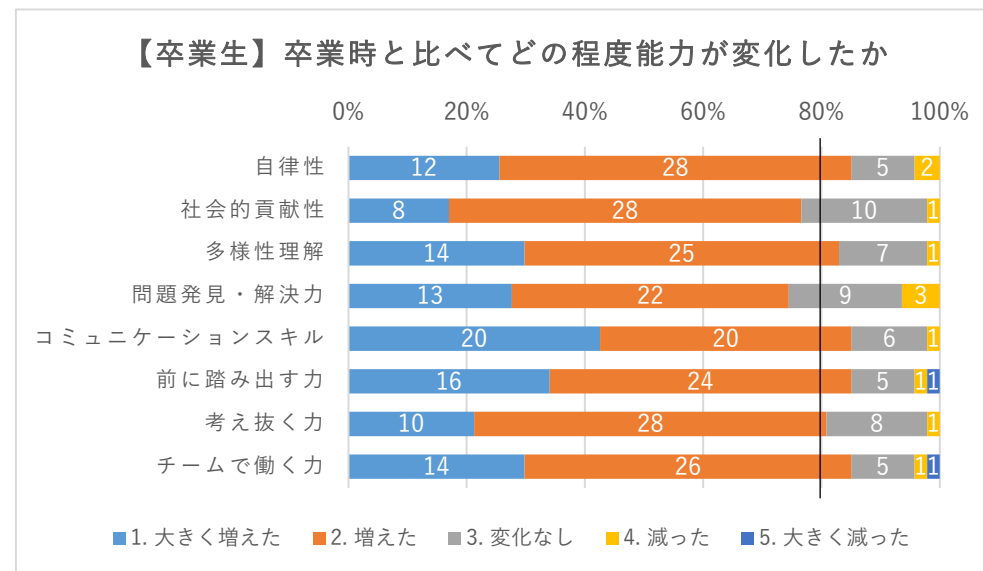
❖ 調査結果 1：就職先企業・団体向け調査結果、卒業生向け調査結果の比較

Q. 8 つの能力・資質について：

〔企業調査〕 本学の卒業生は貴社に必要なレベルに達しているか。(n=95)



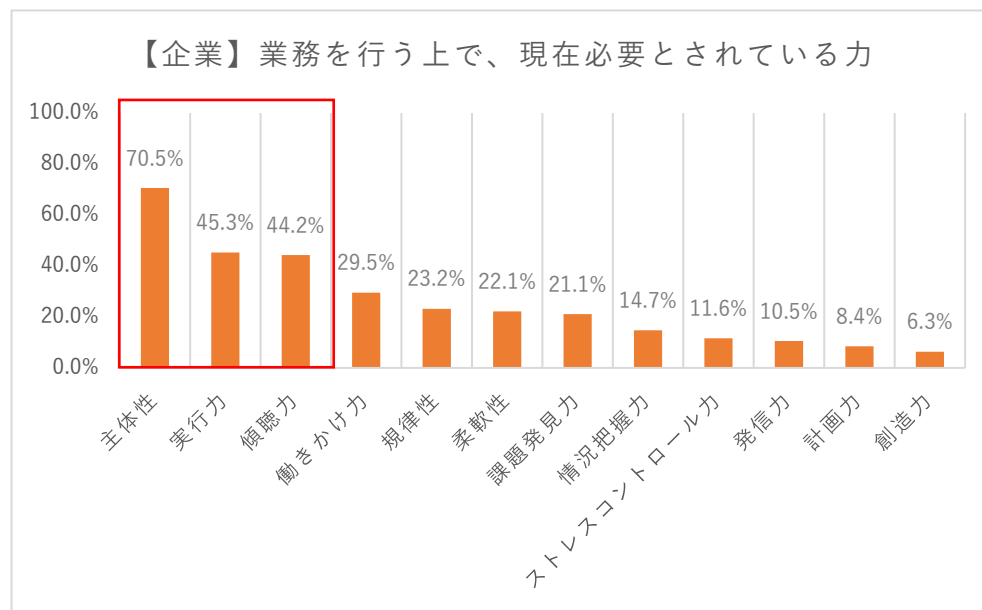
〔卒業生調査〕 卒業時と比べてどの程度能力が変化したか。(n=47)



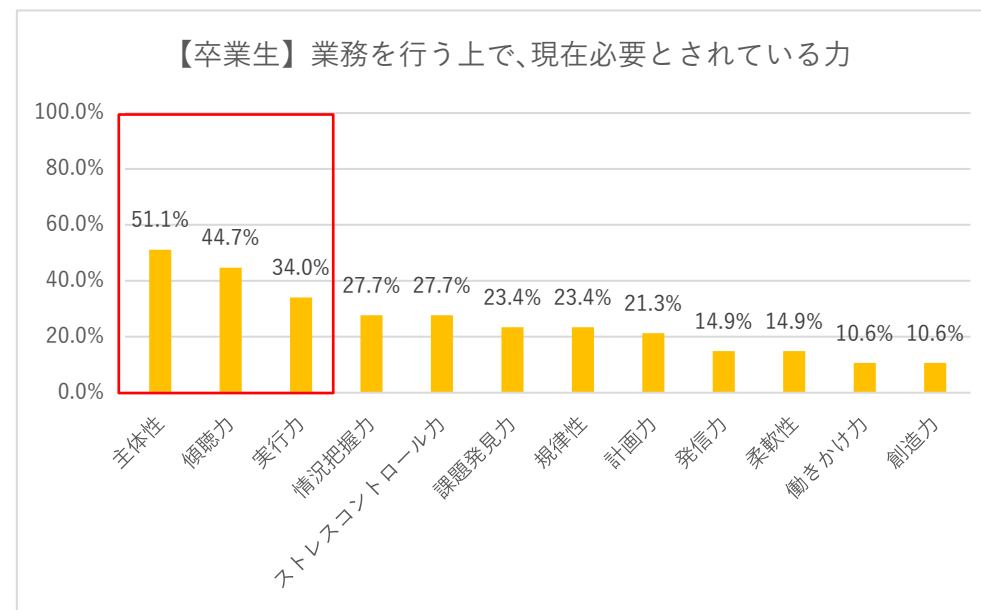
- 企業調査：「達成」＋「ほぼ達成している」の回答が **8割を超えた項目は6項目となり、昨年度調査と同じ結果**となった。
 - ・ 達成率 8 割以上：「多様性理解（86.3%）」「コミュニケーションスキル（86.2%）」「社会的貢献性（83.2%）」「チームで働く力（83.2%）」「前に踏み出す力（81.1%）」「自律性（80.0%）」 ⇒ **社会人基礎力の多くは達成していると評価されている**
 - ・ **達成率 7 割以上 8 割未満：「問題発見・解決力（71.6%）」「考え抜く力（74.7%）」**
- 卒業生調査：「大きく増えた」＋「増えた」の回答が **8割を超えた項目は6項目となり、昨年度と同じ結果**となった。
 - ・ 達成率 8 割以上：「自律性（85.1%）」「コミュニケーションスキル（85.1%）」「前に踏み出す力（85.1%）」「チームで働く力（85.1%）」「多様性理解（83.0%）」「考え抜く力（80.9%）」
 - ・ 達成率 7 割以上 8 割未満：「問題発見・解決力（74.5%）」「社会的貢献性（76.6%）」
- ◎ 「多様性理解」「コミュニケーションスキル」「前に踏み出す力」「チームで働く力」「自律性」「前に踏み出す力」は、就職先企業、卒業生ともに評価が高い。（例年通りの傾向）
- ◎ 「問題発見・解決力」は企業・卒業生ともに低評価。「社会的貢献性」や「考え抜く力」は評価にやや差異が出ている。⇒ 「問題発見・解決力」の評価が低いことは注視する必要あり

Q.「社会人基礎力」について

【企業調査】貴社で働く際に特に必要だと思われるもの（上位3つ）（n=92）



【卒業生調査】業務を行う上で、現在必要とされている力（上位3つ）（n=47）



企業調査では、働く際に必要な力として「主体性」が突出しており、5割程度の卒業生は実感ができている。続いて企業で重視されている「実行力」「傾聴力」についても同様に3~4割の卒業生がその重要性が感じられている。

○ 企業調査

- ・ 働く際に特に必要だと思われる力：「主体性（70.5%）」
- ・ 次いで「実行力」「傾聴力」と4割強の回答。その他項目は、3割以下の回答となっている。

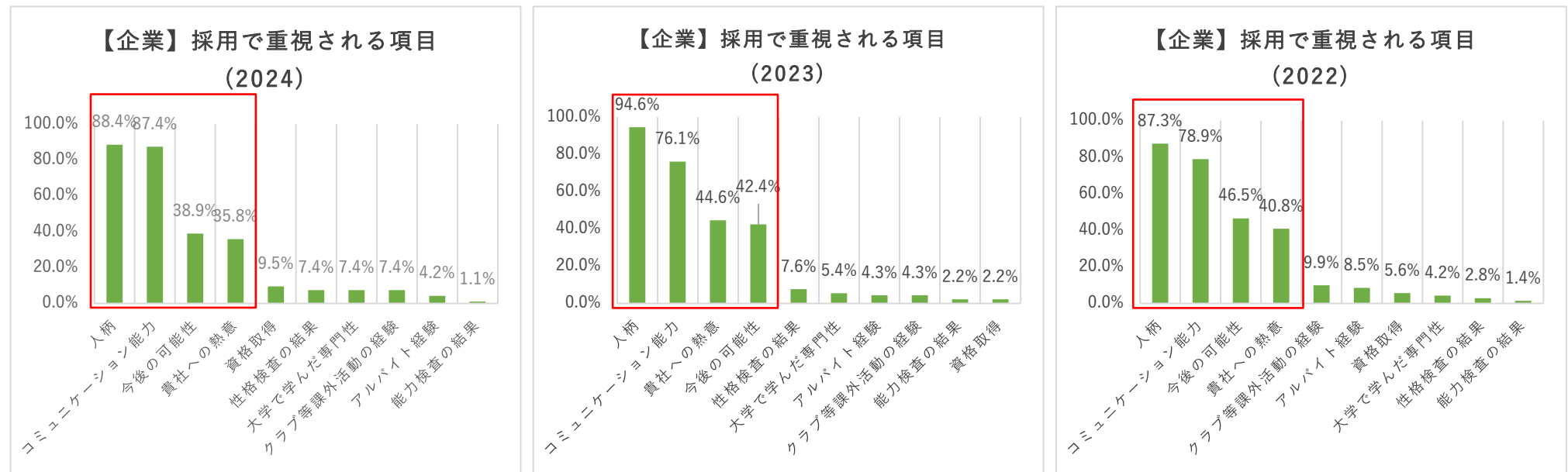
○ 卒業生調査

- ・ 業務を行う上で必要とされている力：「主体性」（51.1%）、次いで「傾聴力（44.7%）」「実行力（34.0%）」と続く。

◎ 就職先企業は①主体性、②実行力、③傾聴力、卒業生は①主体性、②傾聴力、③実行力と企業と卒業生の結果はほぼ同様となった。

◎ 就職先企業は、働く上で「主体性」を強く求めているのに対して、卒業生が理解している「必要とされている力」の理解にはややばらつきがあるものの、約半数の卒業生は「主体性」が最重視されていることが理解できていた。

Q. [企業調査] 採用選考で重視される項目（上位3つ）



2024 年度結果では、採用時に最も重視されるのは「人柄（88.4%）」、次に「コミュニケーション能力（87.4%）」であった。その後、落差があって「今後の可能性」「貴社への熱意」が3割程度で続く。その他の項目は10%以下となっている。（例年通りの結果）

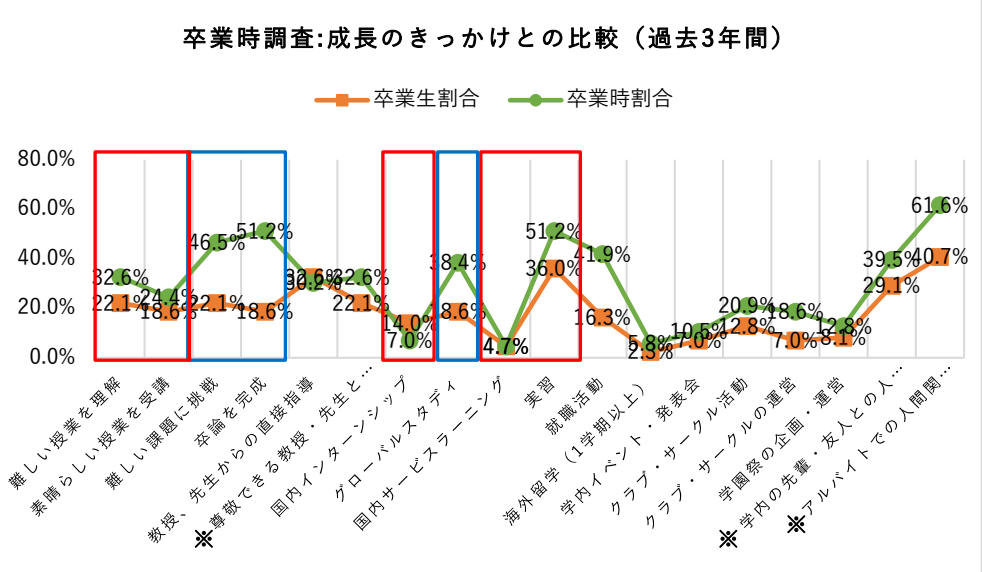
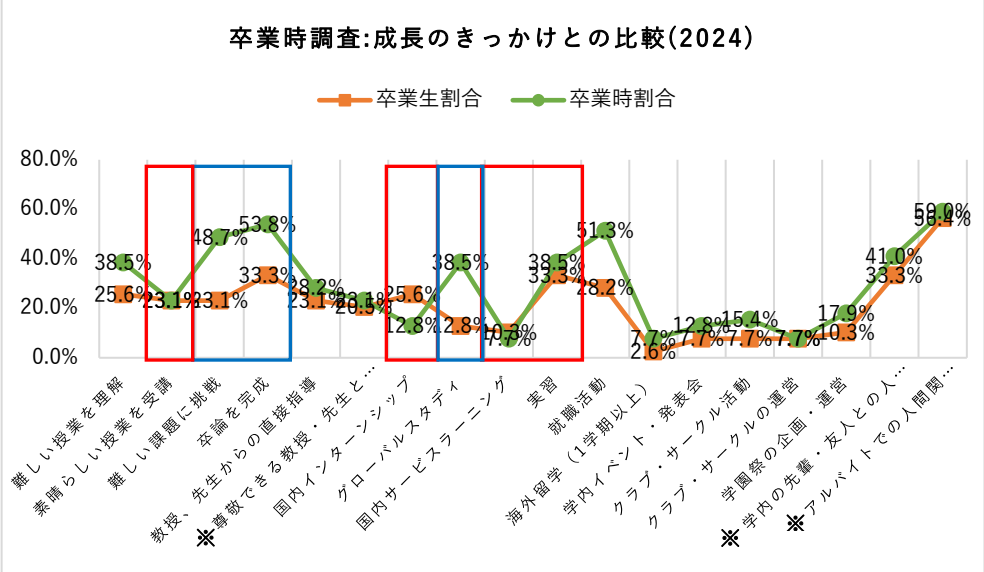
◎過去3年間で、重視される上位4項目：①「人柄」②「コミュニケーション能力」③「今後の可能性」④「貴社への熱意」は変わっていない。

<ご参考> 企業・団体への意見聴取結果報告（2025 年度実施）：

Q.採用プロセスにおいて、学生の学修成果として活用したい情報やデータについて

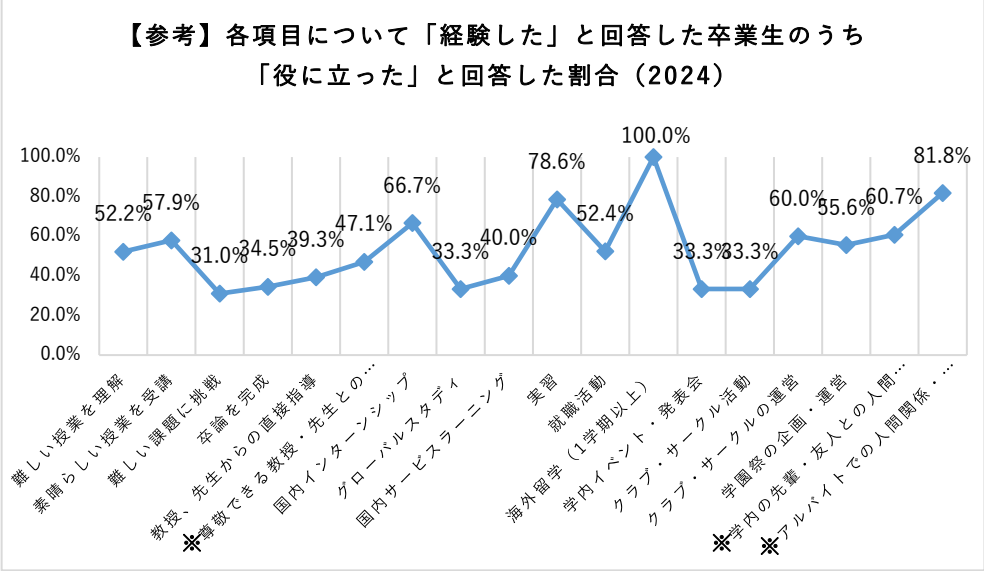
- ・ 学業成績よりも「人と関われるか」とか「チームで働けるか」というところを重視している。学生時代に団体活動をしていたとか、スポーツをやっていたとかいうような経験などを伺う。
- ・ 学生が日常的に関わっていることや、自身の興味関心に基づいた話題についても深掘りする。「なぜそのような考え方に至ったのか」という背景を確認するようにしている。したがって、「課題解決力」や「地域連携」など大学で学んだ内容が具体的に記されている資料は、我々としても非常に質問しやすく、面接での有意義な対話を促す手がかりになる
- ・ 問題の中で何を課題として捉え、解決すべきだと感じた理由について記されているとよい。失敗体験も重要である。失敗体験は必ずしもマイナスに捉えられるものではなく、むしろその経験をどのように受け止め、どのように振り返っているのかを知りたい。

Q. [卒業生調査] 大学時代の経験で、現在役に立っていること（3つ選択）



注1:「卒業時調査」と「卒業生調査」両方の回答がある学生での集計 (2024年度調査:n=39<左図>、過去3年分(2022-2024年度)合計:n=86<右図>)

注2:凡例の注釈 ※尊敬できる教授・先生との出会い、※学内の先輩・友人との人間関係、※アルバイトでの人間関係・責任の重さ



項目	難しい授業を理解	素晴らしい授業を受講	難しい課題に挑戦	卒論を完成	教授、先生からの直接指導	尊敬できる教授・先生との出会い	学内イベント・発表会	クラブ・サークル活動	クラブ・サークルの運営
役に立った/経験有回答数	12/23	11/19	9/29	10/29	11/28	8/17	3/9	5/15	3/5
項目	学園祭の企画・運営	学内の先輩・友人との人間関係	アルバイトでの人間関係・責任の重さ	就職活動	海外留学(1学期以上)	国内インターンシップ	グローバルスタディ	国内サービスラーニング	実習
役に立った/経験有回答数	5/9	17/28	27/33	11/21	1/1	10/15	5/15	4/10	11/14

<2024 年度結果>

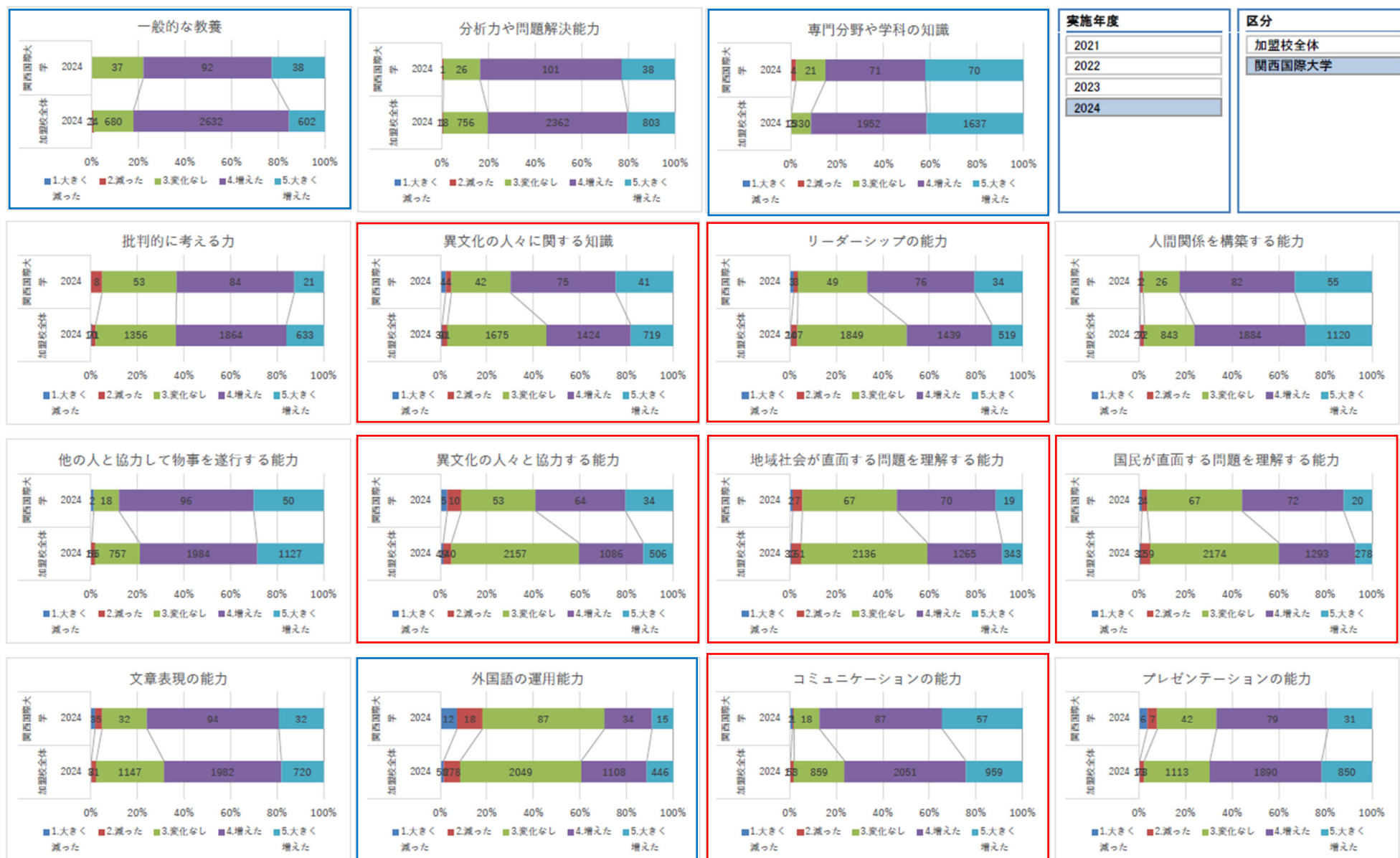
- ・ 卒業時に「成長のきっかけ」として選択割合の高かった「実習」は、卒業後もその印象が維持されている一方、「難しい課題に挑戦」、「卒論を完成」、「就職活動」、「グローバルスタディ」などは、卒業後数年たった時点ではその印象が薄くなっているように見受けられる。
- ・ 「アルバイトでの人間関係・責任の重さ」「学内の先輩・友人との人間関係」などの「人とのつながり」に関する経験は社会に出た後も比較的印象が維持されている。
- ・ 「国内インターン」が卒業時から卒業後にかけて大きく上昇している。要確認事項と捉え、今後の調査で精査する。

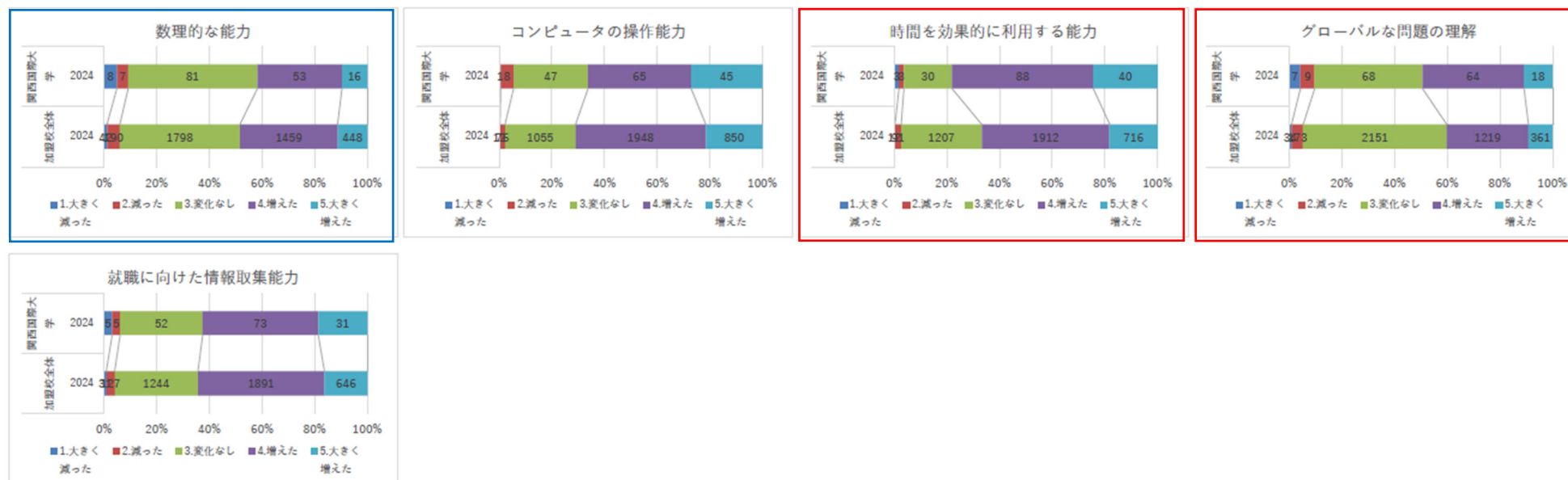
<過去 3 年間の集計結果>

- ・ 3 年間の集計ではさらに傾向が強くなる。「難しい課題に挑戦」「卒論を完成」は卒業時から大きく低下、一方で「教授、先生からの直接指導」は卒業時からほぼ変わっていない。
 - ・ クラブ・サークル活動、学内先輩・友人関係なども、卒業後に小幅ながら印象は薄くなっているように見受けられる。
- ◎ 印象が高く維持されている「人とのつながり」に関する経験は、卒業後の社会生活において想起される場面があるものと推察される。在学時のうちに、経験学習におけるその経験と将来の経験との「関連性」を示すことができれば効果的かもしれない。プログラム計画において考慮すべき事項といえる。

❖ 調査結果 2：他大学との比較（大学 IR コンソーシアム「卒業生調査」結果との比較）

Q. [卒業生調査] 在学中を振り返って、知識や能力はどのように変化したか。





<2024 年度結果>

多くの項目で、「大大きく増えた」「増えた」実感の割合が加盟校全体よりも上回った。

- ・特に上回っている項目：「異文化の人々と協力する能力」「リーダーシップの能力」「異文化の人々に関する知識」「国民が直面する問題を理解する能力」「地域社会が直面する問題を理解する能力」「グローバルな問題の理解」⇒「**経験学習で伸びる能力**」が特に差が大きい
- ・上回らなかった項目：「外国語運用能力」「一般的な教養」「専門分野や学科の知識」「数理的な能力」など ⇒ **現場には強いが知識やスキルの蓄積が課題か**

- ◎ 経験学習やアクティブラーニングをはじめ、本学の教育を通して在学中に伸びた能力は長期的に（卒業後も）影響していることが伺えるが、現場で活かす知識とスキルの涵養は課題といえるかもしれない。

以 上